

リコー三愛グループの明日へ

創業者の生きざまを学び、それを力に、飛躍する時

三愛会会長 近藤史朗

ユニークな企業グループ

リコー三愛グループという企業群は、創業者・市村清を親とした兄弟のようなものです。市村は、1936年、理研感光紙（現リコー）を創業しました。初めは感光紙事業でしたが、今では、事務機器や光学機器の製造・販売なども展開しています。

戦後になると、おしゃれの店三愛をはじめ、航空機燃料の供給等を手掛ける三愛石油、情報機器・精密加工部品・産業機器・腕時計のリコー時計（現リコーエレクトロニクス）、コカ・コーラやジョージアコーヒー等の清涼飲料を手掛ける日米飲料（現コカ・コーラ ボトラーズジャパン）、日本初のリース会社となった日本リースなど、業種の異なる企業を次々と創業しました。

これら市村が創業した兄弟のような企業を中心に構成されたのが、リコー三愛グループです。異業種企業群というユニークなグループで

すが、兄弟同士が互いに切磋琢磨し、それぞれの事業で活躍してきたことが私たちの誇りであり、今後もそうあり続けたいと思っています。

市村清と三愛精神

佐賀県の貧農の家に生まれた市村の生涯は、まさに茨の道でした。また、事業に成功してからも、険しい道が続きました。次々と襲った苦難や困難は私たちの想像を絶するものでしたが、それらを乗り越え、道を切り開くことで、リコー三愛グループを立ち上げたのです。

市村は、戦後まもなく創業の精神「人を愛し国を愛し勤めを愛す」（三愛精神）を掲げました。その基本は、仕事を通して、人のため、社会のために役立ちたいという思いです。

この創業者の精神を受け継ぎ、厳しいときにこそ前進するという気概と行動力を持ち続け

ることが、私たちに与えられた使命だと思っています。

一方で、後年、市村は館林三喜男（第2代三愛会会長）に「三愛精神は、愛という言葉のため寛容の精神と誤解されやすい。そのためややもすればリコー三愛グループには、きびしさや欠如していた」と語っています。

私はこの話から、三愛精神は受動的なものではなく能動的なものとして考えるべきだと思います。ですから、私たちは、誰かに守られている愛のあふれる環境を求めのではなく、仕事を通して人や社会、世界の役に立つという積極性を持って進んでいきたいと思えます。

企業は人々や社会の役に立つてこそ存在意義があります。社員は企業のために、どんなポジションであれ、常にイノベーターでなければなりません。市村が三愛精神に込めた思いを引き継ぎ、人々の役に立つ企業集団であり続けたいと願っています。

道を切り開く人

「人の行く裏に道あり花の山」、市村清の座右の銘です。人と同じ道を行けば、人と同じ景色しか見えない、人が行かないところに行けば、美しい景色が現れる。人がやらないことを求めてこそ発見がある、と市村は言います。

「お客さまというのはどんな商品にもサービースにも不満を抱くものである。その不満の裏にある、お客さま自身も気づいていない夢を見いだせるかどうか、新しい商品の開発につながる」、これが経営者としての信念でした。

創業者・市村清は何を考え、どのように行動して、リコー三愛グループを築いてきたのか。創業の精神「三愛精神」に込めた真の思いは何か。

今こそ、創業者の精神と生きざまを学び、それを力にし、さらなる飛躍を目指す。

アップル社創業者のステイブ・ジョブズは自分の母親が携帯電話を使いにくいと言っていることをヒントに iPhone を開発したそうですが、市村の発想と相通じます。

また、ネスレ名誉会長ヘルムート・マウハーの著書の中に、「リーダー（経営者）とは道を切り開く人であり、マネジャーとは問題を解決する人である」という言葉があります。

市村の興したファクション、リース事業、そしてオートメーション化したカメラ製造ラインなど、それまでなかったビジネスモデルは無から有を創造するものでした。

ステイブ・ジョブズと市村清、二人は時代を超えて希代の「道を切り開く人」であったと言えましよう。

戦後の目覚ましい復興は、市村をはじめとした先人たちの努力の結果成し遂げられたものです。1980年代には、「Japan's No.1」とまで称されました。しかし今の日本は次の成長の種を見つけ出すことができずに長い停滞の中にいます。今こそ先人の生きざまに学び、第2、第3の創業に挑む時が来っていると確信しています。

次代に向けて

『市村清実践哲学』（新装版…三愛新書）には、「事業の本質は世のため、人のために尽くすということにある」など、市村の遺した言葉の数々が著されていて、その生きざまに触れることができます。

市村が泉下の客となって半世紀。彼が身をもって示した「哲学」は時代を超えて、今を生きる私たちに力を与え続けてくれています。

リコー三愛グループはこの厳しい時代を乗り越え、将来も、人々や社会のために役立つ企業群であり続けなければなりません。

そのために、今こそ、創業者の精神と生きざまを学び、それを力にし、グループ一丸となって、明日に向かってさらなる飛躍を目指していく時であると考えています。

